

ACT-Kより、京都での「未来語りのダイアログ研修」報告あり！

2017年4月29日(土)

「フィンランド発 未来語りのダイアログとは？」

～「未来から現在(いま)を振り返り、思い出すこと。そこにあなたの未来が現れる」～

主催：ODNJP (オープンダイアログネットワークジャパン)

■タイムスケジュール(予定)

- ・12:30～13:00：開場・受付
- ・13:00～17:00：講演会

■会場：東京大学駒場Iキャンパス 21KOMCEE East K011
京王井の頭線「駒場東大前」駅

■参加費：ODNJP 会員¥2,000、非会員¥4,000

*開催日において、会員登録がお済の方のみ、会員料金でお申込み頂けます。

■募集定員：240名

■申し込み方法：URL と QR コード

・ODNJP 会員：<http://bit.ly/2jHD5sX>



・ODNJP 非会員：<http://bit.ly/2khr01z>



■お問い合わせ先：odj@skc-net.or.jp

*トム・アンキル教授、ロバート・アンキル氏とのやりとりは、英語から日本語への逐語通訳により行われます。



トム・エリク・アンキル
(Tom Erik Arnkil)

フィンランドの国立保健福祉研究所教授。ヘルシンキ大学社会政策学准教授。さまざまな支援の現場における多職種連携のあり方を研究する中で、「未来語りのダイアログ (Anticipation Dialogue)」を開発し、セイックラ教授とも共同研究を行ってきた。



ロバート・ボブ・アンキル
(Robert Bob Arnkil)

弟のトム氏らと共に、「未来語りのダイアログ (Anticipation Dialogue)」を開発。
Arnkil Dialogues 代表。



総合司会 齋藤 環
(筑波大学教授)

◎ACT-K

ACT (Assertive Community Treatment) とは、多職種がチームを組んで、24 時間 365 日の体制で、生活の場に訪問することによって重度の精神障害者の地域生活を支えるための仕組みです。脱施設化の進む 70 年代のアメリカに生まれ、日本ではこの 10 年新しい地域精神医療・福祉として注目されてきました。ACT-K は日本ではじめて民間の取り組みとして京都で ACT をはじめ、地域に根付いた活動を行ってきました。ACT が地域で様々な機関と連携してより質の良い援助を行うために、ACT-K ではオープンダイアログとともに「未来語りのダイアログ (anticipation dialogue)」の思想と方法を取り入れることをめざしています。



Anticipation Dialogue

～未来語りのダイアログへの招待～



「未来語りのダイアログ」とは何か

「未来語りのダイアログ」(Anticipation Dialogue)は、多機関、多職種が連携して行う対人支援活動をうまくやっていくための方法です。そのような活動は、往々にして各機関、各職種間のコミュニケーションがうまくいかず、行き詰まってしまうことが多くあります。このダイアログは、オープンダイアログとともに1980年代のフィンランドではじまり、さまざまな場面で実践されてきたものです。現在では、オープンダイアログとともにフィンランドのソーシャル・ネットワークにおけるダイアログの方法として重要なものとなっています。

どのような場面で使われるものなのか

オープンダイアログは精神科領域において精神病的危機状態を対象にしたダイアログとして有名ですが、「未来語りのダイアログ」は多様な関係者がかかわるさまざまな社会的場面で用いられます。それは多様な関係者がかかわりながら長きにわたって変化が起こらなくなってしまったり、異なる立場の人々のあいだで不安や不満がくすぶり、関係者相互の信頼が揺らいでいたりして、どうしていいかわからなくなってしまった状況を打開するために行われます。

具体的には、クライアント・家族と専門家ネットワークのあいだで問題がおこっている場合、あるいはひじょうに様々なネットワークのあいだ(例えば、職場内のチーム、病院と地域住民のあいだなど)で問題がおこっている場合です。

どのようなやり方をするのか

誰であれ、ある状況についておこっている「自分自身」の不安・心配に対して心から援助を求めることによって、ファシリテーターが手配され、ネットワークが集められ、未来語りのダイアログが行われます。

未来語りのダイアログの目的は、「未来」をめざし、不安を和らげて心配事を解決するために一緒に行動する計画をつくることにあります。そこではファシリテーターは、1) <対話>を促すこと、2) そのために構造を調整すること、3) 必要に応じて「未来の想起」という技法を用いてこの目的を達成することです。「未来の想起」とは、未来において望ましい結果になっていると想定し、それにたどり着くための行動を計画する方法です。このようなダイアログを用いて、悩ましい状況に対して多くの<声>からなる理解(ポリフォニー)をつくりだしていくのです。

どのような効果をもたらすのか

話を聴いてもらうこと、他者の話に耳を傾けることは、「今ここで」参加者をエンパワメントする力をもっています。さらに、好ましい未来について可能な限りいきいきと考えられ、みなが一致してそこに向けて行動する計画をつくっていくプロセスそのものが、その場にいる人たちに希望とエネルギーを与えます。未来語りのダイアログが最もうまくいったときには、情緒的なふれあいが生じ参加者それぞれがエンパワメントされるのです。

今回の講演会では、「未来語りのダイアログ」の開発者の一人であるトム・アンキルさんらを迎えて、ソーシャルネットワークを生き生きとしたものにし、多様な人々が立場を超えて共に生きていく社会を実現するためのダイアログの思想と実践について学びたいと思います。

精神科医療の世界で話題となっているオープンダイアログですが、その基本にあるダイアログの思想は、精神科医療や福祉の世界を超えて、人と人のつながりを大切にしたい社会を実現する希望をもたらしてくれます。

高木俊介 (ACT-K)